

生活科・総合的な学習の時間講演会の概要  
演題「確かな学力を身に付ける生活科・総合的な学習の時間の授業づくり」  
～探究的・協同的に学び合う活動を通して～  
講師 共栄大学 若手三喜雄 教授

＜生活科との出会い＞

- 昭和63年まで低学年の理科がなくなるという動きの中で、私は主として低学年の理科をがんばっていた。生活科が誕生し、生活科に携わるようになり、それ以来生活科にかかわってきた。
- 生活科の学会を作ることになり、中野調査官などと学会を設立した。それ以来学会にかかわり、現在日本生活科・総合的学習教育学会の副会長をさせていただいている。

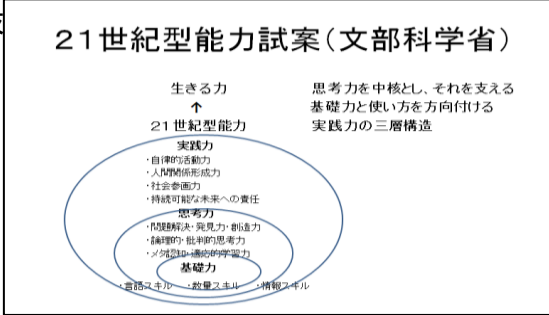


＜社会の変化に伴って求められる学力の変遷＞

- 昭和20年代～昭和50年頃までは、社会は高度経済成長時代であり、知識・理解・技能が重視され、ミニテストで100点を取ったら合格で、取らなければ居残り勉強ということをしてきた。
- その時代は、たくさんの知識・技能を身に付けていることが、これからの社会に役立つということで、一流大学、一流企業に入って、年功序列で老後は安泰であった。
- 昭和50年～平成元年ごろまでは、バブルが崩壊して安定期に入った時代であり、主体的に学ぶ力ということで、関心・意欲・態度が重視された。いわゆる新しい学力観が出てきた。
- その時代の求めに応じて、生活科が誕生した。どうしても低学年の社会や理科は教えることが多くなり、子どもたちが主体的に学んでいないのではないかという反省が出てきた。どうやって子どもが自ら学ぼうとするかということである。
- 生活科は、子どもたちの関心・意欲・態度を高めるということで考えれば、考えてから試行するというよりも、考えることと体験が一体となっていることが教科設立の趣旨であった。
- しかし、設立から25年たって、子どもたちの発達もかなり変わってきた。その意味では、思考と活動が一体でないのだめなのか、それともある程度分けてよいのかということも変わってきた。
- 白梅女子学園大学の無藤先生は「幼稚園の年長あたりから、思考と体験ということで、体験をしたことを発表することをさせていいのではないか」と言っています。子どもたちの発達も変わってきて、実際に幼稚園の年長の子どもが発表している様子を見ることがある。
- 平成元年～現代までは、低成長の時代でありネット時代に入ってきた。以前は、保護者会で話題になっていたのは、「なぜ直接家に行かず、電話で遊べるかどうか連絡を取ってから遊ぶのか」ということであったが、現在はメールやLINE等でやりとりをしている。寝る暇もないほどである。
- 変化がどんどん早くなってきている。こうしたイノベーションの時代に求められている学力は、生きる力であり、現在思考力・判断力・表現力が重視されている。知識はすぐに陳腐化する。
- 平成8年に中教審第一次答申で、国際化、情報化、科学技術の発達、環境問題等が課題とされた。そして、これらの問題を解決するための力を付けていかなければならないということで、平成10年に学習指導要領が改訂され、「生きる力」を身に付けるために総合的な学習の時間が創設された。
- 生活科と総合的な学習の時間については、学習指導要領の目標の書き方も似ているし、どんな力を付けるかということもかなり共通点がある。
- 平成20年の学習指導要領の改訂では、知識基盤社会、グローバル社会ということで、「生きる力」の継承と、基礎的な知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、主体的に学習に取り組む態度が求められている。

○従来求められていたスキルは、個人が知識を正確に理解する力、与えられた課題を効率よく解く力であった。これからは、解のない社会ということで知識・技

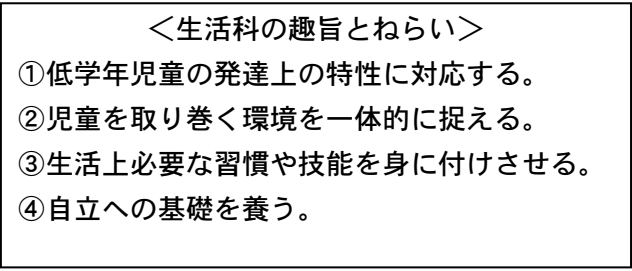
○これからの社会に求められるスキルは、問題解決能力やコミュニケーション能力等の21世紀型スキルである。文部科学省でも「21世紀型能力試案」ということで、知識・理解による基礎力、問題解決する思考力、そして実践力まで含めたものを「21世紀型能力」として規定している。



- 思考する力、活用する力がないとこれからの社会は生き残ることができないとされている。
- 少子高齢化社会・人口減少社会・グローバル社会・自分自身について考える社会をどう生き抜くか。町探検でバス停が無くなることで困る人がいることを考えることができる。地域社会でどれだけ役に立つことをできるのかを考えるのが生活科や総合的な学習の時間の価値ではないか。
- 秋田や富山に行くと、人口がどんどん減少している。学力が高いのはいいが、都会に出て行ってしまうので、どうやって地元に戻ってくるかということが課題になっている。地元に戻って来たくなくなるような思い出に残る地域のことを取り上げた総合的な学習の時間の授業をやってもらいたいと言われる。
- これまでの授業を振り返ってみると、高度成長時代では与えられた課題を解決するという「定食型」であり、その後の生活科が始まった時代では、課題や方法を自分で選択して解決することができる「バイキング型」である。料理は作られている。
- しかし現在は、料理は作られておらず、材料を集めるところからスタートする。課題や方法を自分たちで見付け、協力して解決する「協同調理型」という時代になっている。

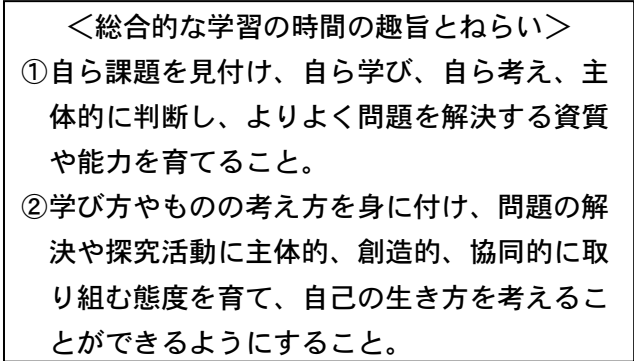
**＜生活科の創設の趣旨やねらいを振り返って＞**

- 平成元年（1989年）に児童の発達上の特性や社会の変化に主体的に対応できる能力の育成等をめざし、生活科を創設した。
- 新しい学力観を具現化させるための教科として誕生した。
- 日本生活科教育学会全国大会が平成4年12月5日、6日に埼玉で行われた。その大会テーマは「21世紀の学校と生活科の可能性」とした。
- ①体験を重視する ②個性をいかす ③学校と家庭・地域とのかかわりを見直す ④授業をかえるという4つの視点で熱心な討議が行われた。
- 課題別研究では、①生活科学習指導における教師の役割、②生活科の学力と評価、③他教科に生きる生活科の可能性、④生活科授業研究の方法、⑤環境教育と生活科が行われた。また、地域を大切にすることで、「お国自慢」ということで各県の特異性を打ち出した研究が行われた。



**＜総合的な学習の時間の創設の趣旨やねらいを振り返って＞**

○総合的な学習の時間は、生きる力の育成を具現化させる一定のまとまった時間として平成10年（1998年）に創設された。各学校が創意工夫を生かして、特色ある教育活動を展開することや、既存の教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習を実施する学習である。



○平成26年6月14日、15日に開催した日本生活科・総合的学習教育学会第23回全国大会のテーマは「かかわりを深め、新しい社会を創造する学びはどうあるべきか」ということを掲げた。

○埼玉大会では基本的な柱として、以下の4つの学習活動を入れて取り組んでいただいた。

- ①自己決定・自己判断が求められる学習活動
- ②実社会と直接かかわる学習活動
- ③実社会とかかわり達成感を味わう学習活動
- ④新しい社会の創造にかかわる学習活動

○協同的に学ぶための基本的な工夫としては、次の3点である。

- ①思考が見える形で提示する板書の工夫
- ②外部人材の活用の工夫
- ③地域社会と直接かかわる工夫。



○探究的に学ぶための基本的な工夫としては、次の3点である。

- ①児童の思考過程を大切にす工夫
- ②児童が主体的に課題を設定する工夫
- ③整理・分析での話し合いの場面の工夫

○一人ひとりが考えたことを小グループだけの話し合いに留めるのではなく、全体に戻さないといけない。生活科や総合的な学習の時間に限らず、各教科等でも十分活用できる。あの人のおかげで私は考えを深めることができたということがある。

○グループごとに考えたことを他のグループにも説明し合う活動を入れて、その時間は机に座ることがなくなる授業を参観した。付箋等を用いながら交流する。これは中学校でも活用できる。自分の意見が他の人の考えを深められたという自己有用感にもつながる。

○そのためにも、思考が見える形で提示する板書の工夫が必要である。こうした協同的な学びの良さを大切にする必要がある。

○探究的に学ぶということは、子どもの思考過程を大切にしようということである。また、教師が与える課題ではなく、子どもが主体的に課題を設定する必要がある。長いスパンで学習を行うからなおさらである。また、整理・分析の段階での話し合いの場面の工夫も必要である。

○生活科と総合的な学習の時間の違いを考えると、内容等の規定・発達段階の違いはあるが、身に付けるべき力や学習方法はほぼ同じであると考えてよい。

○各学校で、探究的・協同的な取組の工夫や探究的で協同的な学習で身に付く力、実践上の問題点等を出し合って協議をしていただきたい。

○「記憶に残る生活科・総合的な学習の時間」を行ってほしい。学生にどのような生活科・総合的な学習の時間をしたか聞いても、あまり出てこない。

○出てくるのは、「ザリガニ釣りをした」「職場体験をした」「オープンキャンパスに行った」「席替えをした」「高校調べをした」等しか出てこない。

＜生活科と総合的な学習の時間の共通点＞

- ①自立への基礎・・・自己の生き方
- ②主体的な学習・探究的な学習・協同的な学習・創造的な学習など
- ③教科等で身に付けた力を活用する学び
- ④常に、「自分は」を考えて取り組む学び
- ⑤学びを交流し合い、よりよいものを目指す学び
- ⑥地域社会と交流し合う学び

＜今、授業の何を变えればよいのか＞

○授業は「協力してより良いものを追究し合う場」であるという考え方も持つべきではないか。

○生活科・総合的な学習の時間だけでなく、他の教科でも探究・協同で問題を解決するということを考えていくべきである。

- その中で大切なことは、以下の3点を授業で必ず位置付けることである。
  - ①自分の考えをもつ
  - ②他者に分かりやすく伝えること
  - ③他者と考えを交流し、より高めようとする
- 「導入→展開→まとめ」から、次の時間の新たな課題を生み出して終わる「展開→まとめ→導入」を生活科・総合的な学習の時間だけでなく、他の教科でもできるのではないか。毎時間でなくてよいので、次の時間の導入をしてから、課題を生み出して終わり、それを家庭で考えることもいいのではないか。
- 授業は「家庭学習は情報収集の場」である。授業で完結してしまうと家庭ですることがなくなってしまふ。考えを交流する時間を多く確保するためには、終末に次時の導入をやって家庭でやってくる課題を明確に示すべきである。
- 授業は「創造・定着・発展の場」である。新たな創造、発展につなげるために、整理・分析等を通して、創造・定着・発展する。自分さえよければよいのではなく、みんなで学ぶことで現状よりよいものに高めようとする、友だちや自分自身のよさに気付くことが大切である。
- どうやって同じように興味をもたせるか、みんなで学ぶことがよりよいものに高められるということに気付かせなければならない。
- 授業は「自覚し、納得する場」である。自分自身の成長を自覚する時間にしなければならない。自分自身が変わったことの自覚をもたせる場を特に生活科・総合的な学習の時間では位置付けていかなければ、記憶に残る授業にならない。
- 自分自身だけの力ではなく、他者とのかかわりの中で成長したということを中学校でも意図的に位置付けていくことが大切である。自分自身や自分の生活についての気付きについて、意図的な振り返りの場を必ず設定することで、活動における自己関与意識、成就感、仲間意識、帰属意識がもてるようになる。
- 自分自身の成長に気付くこと、これからの成長への願いをもって意欲的に生活しようとするために幼・小・中連携した学びが大切である。発達段階に応じた、連続した学びを意図的に仕組むことがこれから大切になってくる。

＜幼・小・中連携した学び＞

- 1 規範意識の育成
  - ・ 基本的生活習慣
  - ・ 発達段階に応じた学習規律
- 2 授業改善
  - ・ 考えをもち、話し合い、高め合う授業
- 3 家庭学習の定着
  - ・ 授業と家庭学習で

**＜生活・総合に共通する自立への基礎を培うこと＞**

- 自立への基礎は以下の3つある。
  - ①学習上の自立
  - ②生活上の自立
  - ③精神的自立
- 「学習上の自立」とは、総合的な学習の時間と重なる自己の生き方ということにつながるが、自分にとって学ぶことの価値の自覚である。低学年にとって学習の自立は、自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んでできることである。また、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できるということである。
- それを総合的な学習の時間として、発展的に考えると、「なぜ学ぶのか」「どういう価値があるのか」等のように、自分にとって学ぶことの意味や価値を自覚させることが大切である。そのためには、何が必要かと考えると地域との連携がある。自ら地域とかかわるからこそ、価値を自覚できる。
- 「生活上の自立」とは、低学年で言えば、身近な人々、社会及び自然と適切にかかわることができることであり、自らよりよい生活を創り出していくことができることである。

- 総合的な学習の時間で言えば、自らの生活や行動について考えること、今何をすべきか、どのようにすべきかを考える力が必要である。
- 「精神的な自立」とは、低学年で言えば、自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことである。また、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことができることである。
- 総合的な学習の時間で言えば、学んだことを現在及び将来の自己の生き方につなげて考えるというキャリア教育の考え方である。
- 小学校で仕事をいろいろ調べていたが、この職業というのはみんなつながっていることに気付くことができた。それぞれの職業はみんな大事であるし、みんなつながっていることを長期的に学習していく中で考えることができた。その中で、自分はどんな生き方をしなければならないかということを考えていくことができた。

### ＜未来を生きる子どもたちに付ける学力＞

- 未来を生きる子どもたちに確かな学力を！
  - ①自分の考えをもち、社会と積極的にかかわろうとする子ども
  - ②他者に分かりやすく、自分の考えを伝えようとする子ども
  - ③互いに伝え合い交流することで、自分の考えや集団の考えを高め合おうとする子ども
  - ④互いの存在を認め合い、尊重していこうとする子ども
- 20年後を生きる子どもたちは、予測がつかない社会の変化に直面する。便利な反面、つながりが薄れていくのではないか。
- しかし、変わらないものもある。
  - ①自ら判断、主体的に行動（主体性）
  - ②人と人とのつながり（社会性）
  - ③好奇心・探究心・表現力（意欲）
  - ④心身ともに健康、安全、生命尊重
- これからの子どもたちに必要な力というものをもう一回見直してみることが必要。だからこそ生活科・総合的な学習の時間が大切だということを考えて、思い出に残るような生活科・総合的な学習の時間の授業を行っていただきたい。
- 学問というのはたくさんのことを覚えればよいのではなく、活用してみても初めて成り立つものである。
- 夏目漱石の「愚見数則」を紹介して講演を終える。

夏目漱石「愚見数則」

ただわかったばかりで実地に応用せねば、  
すべての学問は徒勞なり、  
昼寝をしている方がよし。  
教師は必ず生徒よりもえらき者にあらず。  
(明治28年4月愛媛県尋常中学校)